

第十六章 戦車レッド・エレファント

ウクライナー共和国の港湾都市オデッセイの沖にある島、と言うより砂州に突然レッド・エレファントが上陸する。もともと無人の砂州だがオデッセイから小麦を輸送しようとするウクライナーの船舶の航行を阻止するためにソシア軍が駐留している。

ソシア守備隊は自分の目を疑う。なぜなら無限軌道を持つ変わった形をしていたからだ。しかも砲塔には象牙色の長い牙が二本あってその間に柔らかそうな砲身がある。しかも砲塔の左右には象の耳を連想させる大きな防弾膜がある。まさしく巨像、いやマンモス象を思い起こさせる。

「どこから来た？」

「近くに船はいないぞ」

「一両だけだ。うろたえるな」

「こんな戦車、見たことない」

「無駄口叩かずに攻撃しろ」

なぜすぐ攻撃しなかったのかという理由がすぐ分かる。戦車がたった一両で足場の悪い砂州に上陸してくるなどあり得ないからだ。ソシア軍守備隊を攻撃するならフリゲートからのミサ

イルを発射するか艦砲射撃、それか戦闘爆撃機で空爆するしか考えられない。それに今のウクライナー軍にはそのどれも不可能だった。

守備隊は大砲のみならず対艦ミサイルや対空ミサイルも配備していた。しかし、戦車の上陸は想定外なので対戦車砲は配備していない。

とりあえず自動小銃で攻撃するが跳ね返されてしまう。レッド・エレファントはミサイル発射装置に向かうと牙をグリーンと伸ばしてすくい上げて空高く放り投げる。

「何という攻撃だ！」

数々の戦闘を経験してきたベテラン兵も舌を巻く。それどころか恐怖心を抱く。

*

レッド・エレファントは守備隊を壊滅させるとクリーム半島方面に向かう。水深が浅い所を選んで潜水艦のように砲身を垂直に上げてまるでシュノーケルのようにして前進する。水中を進んでいるにもかかわらずその速度は百ノットに迫っていた。

残兵がすぐさまソシア軍司令部に報告するが信じる者はいない。当然と言えば当然だろう。まもなくレッド・エレファントはクリーム半島に上陸すると今度は二百キロを超す猛スピードでソシア海軍ブラックシー艦隊基地に向かう。

ほんの小一時間で艦隊基地に到着する。ソシア軍戦車が基地入り口で阻止しようとするが、レッド・エレファントの柔らかさうに見えた砲身がピーンと伸びて真っ赤な光線を発射する。

爆発することなく戦車はまるで赤ペンキをかけられたように真っ赤になる。

レッド・エレファントは正面突破して艦隊基地に突進する。そして停泊していたブラックシ―艦隊旗艦を狙って再び赤い光線を浴びせる。一瞬の内に旗艦は真っ赤に染まる。レッド・エレファントの砲塔の大きな耳のような膜がヒラヒラと上下運動を始めると旗艦は強風あおられた砂上の楼閣のように崩れ始める。そして赤い砂となって舞い上がる。

狼狽えるロシア兵は新型コロナウイルスの感染を防ぐためにマスクをしているからこの赤い砂を吸い込まなくて済んだ。しかし、上空を含め夕焼けのような美しい赤い世界ではない。ほかの色と共存しながら夕闇を赤く染めるのではなく、すべてがペンキのようなヌルヌルした赤い砂嵐に包囲される。

赤い砂嵐は停泊する巡洋艦、駆逐艦、フリゲート、輸送艦、潜水艦、上陸用舟艇を襲う。意図して渦巻いている。まるで鉄を好むように艦船を包み込む。しばらくするとすべての艦船も赤く染まる。そして見る間のうちに錆び付いて赤い粉が浮き出して舞い始める。啞然としていたロシア兵たちは慌てて逃げようとするがズボンがズレて転ける。バンドの鉄製のバックルが錆びて消失したのだ。ステンレス製の腕時計さえも錆びる。もはや時を刻むことはない。

すぐさま緊急通信をしようとするがアンテナも錆び付いて地面に落ちていた。携帯無線器も錆び付いて機能しない。基地近辺の鉄骨建物はもちろんのことすべてが錆び付いてしまった。海軍基地なので重火器を持つ兵士は少なかったがそれらも使い物にならなくなる。

この異様な光景がプチレンコンに伝わったとしても真に受けないだろう。これがソシア大統領の没落のスタートとなった事件で後にレッド・エレファント以下奇想天外な戦車を有名にするきっかけになった。

プチレンコンの知らない間にクリーム半島のソシア軍にレッド・エレファントに対する恐怖心が広がった。赤い光線、そして鉄がすべてが錆びてしまうという恐怖感が広がる。たとえば缶詰は赤い汁を噴き出すしナイフやフォークもボロボロになる。鍋やフライパンも銃も戦車も軍艦も……。

すべての鉄製のあるいは鉄との合金がさび尽くされると赤い世界が残った。その昔ソシア連邦の国旗は真つ赤で赤い国と呼ばれていた。赤色はソシア連邦の象徴でもあった。

*

いつの間にかレッド・エレファントが姿を消していた。数日後プチレンコン大統領はクリーム半島とソシアを結ぶクリーム大橋を使って支援物資をブラックシー艦隊基地に送り立て直そうとする。この攻撃をウクライナーの仕業とは思わなかったが、ウクライナーのソシア領への直接攻撃と見なして核兵器の使用を平然と公言する。その一方でレッド・エレファントに恐怖に近い警戒心を持つ。あらゆる手段を使ってレッド・エレファントを調べさせるが成果はなかった。